City & Life

都市のしくみとくらし
144
Aug. 2025

［特集］

共有のプロセス

～コモニング–commoning–を考える～

4

都市・
まちの色

コペンハーゲン・ヘレルプ駅

Copenhagen/Hellerup Station

加藤幸枝

色彩計画家、有限会社クリマ代表取締役

「図」が映える「地」の存在

前回に続き駅の風景です。コペンハーゲンの中心部からアルネ・ヤコブセンが手掛けたビーチリゾートへ向かう途中、乗り換え駅でだいぶ時間があったので、駅内外を散策して回りました。ヘレルプ駅は1863年に開業された歴史のある鉄道駅で、2018年に大規模な改修が行われました。この際、列車への乗降がホームにあるスタンドにICカードをタッチするシステムに移行したことにより改札口および駅舎の一部が撤去されたため、駅全体が大変開放的なつくりになっています。

ホームを渡る歩道橋の上からホームや駅前広場を眺めてみると、まず鮮やかな色の路線バスが目に留まりました。自動車の一部やホーム上の屋外広告物にも鮮やかな色が見られ、「鮮やかな色は地表近くにあり、命ある／動くものが持ち、かつその面積は小さい」という「自然界の色彩の法則」を思い浮かべました。この法則は私たちがさまざまな環境の色彩を観察するなかで導き出したものですが、花や昆虫などの色が「印象的に見える」要因ともいえるのではないか、と考えてきました。

「鮮やかな色はよく目立つ」という、色そのものの特性がありますが、その目立ち方は周囲や背景との関係性によって決まります。整備された駅の新しい設備やベンチ、舗装材はおおむねごく低彩度色で統一され、あらゆる図的要素を受け止める「地」としての役割が形成されています。

こうして鮮やかな色の「居場所」を整えること。環境の整備や計画に欠かせない視点だと考えています。

City & Life

都市のしくみとくらし

144

Aug. 2025

表紙　インフラスタンド
（関連記事：p.18）

裏表紙　りくカフェ
（関連記事：p.22）

photo：坂本政十賜

contents

［連載］ 第4回
都市・まちの色
コペンハーゲン・ヘレルプ駅
「図」が映える「地」の存在　加藤幸枝

［特集］
共有のプロセス
～コモニング-commoning-を考える～

［対談］
小泉秀樹×占部まり
コモニングの可能性……緩やかな共創の実践　03

［ケーススタディ］
開き、つながるコモニング
❶ ニシイケバレイ　東京都豊島区　08
都心の谷間に息づく、顔の見える関係
❷ タルキプロジェクト　東京都東久留米市　12
地域に必要な農、本、人をつなぐ拠点群
❸ インフラスタンド　埼玉県所沢市　18
水道工事店がつくる、コミュニティを育む公共トイレ
❹ りくカフェ　岩手県陸前高田市　22
コミュニティガーデンの再生を契機に地域のつながりを取り戻す

［インタビュー］
コモニングで「インフォーマル・パブリック・ライフ」　飯田美樹　16

［連載］ 第4回
なぜかいい町、好きな町
神保町　野澤千絵　26

［連載］ 第10回
都市の緑3表彰　緑がつなぐ町・人・暮らし
ばらのまち福山「ばらの花いっぱい運動」　28

back number　32

コモニング（commoning）とは、イギリスの歴史家Peter Linebaughが著書『The Magna Carta Manifesto』（2008年）のなかで示した新しい概念とされている。コモンズを固定された一つの場や象徴として認識するだけではなく、コモンズを生み出し続けようとする人々の実践、動的な関係性により「コモン化」される、そのプロセスが「コモニング」というコンセプトであり、ここには「実践practice」「生成的generative」「関係的relational」「継続的な交渉negotiation」が含まれるという※。そして気づけば、都市のなかでは大小さまざまな「コモニング」が実践されているようだ。そんな「コモニング」な場のあり方と、そこに集う人々との関係性のなかから、都市／街におけるその可能性を考える。

※出典：森一貴「コモニングとは何か？」

［特集］

共有のプロセス

～コモニング–commoning–を考える～

photo：坂本政十賜

対談

小泉秀樹

東京大学大学院工学系研究科教授／本誌企画委員

占部まり

医師／宇沢国際学館取締役

コモニングの可能性

……緩やかな共創の実践

photo：新井卓（p.03～05）／坂本政十賜（p.06,07）

都市のなかに、多様な人々との関係性から生じる「コモン化（commoning）された場」が増えている。従来「コモンズ」は、森林・農地・漁場などの共有地の運営、利益配分の方法と捉えられてきたが、1990年代以降、市場や自治体のシステム外にある共有された資源としての「新しいコモンズ」の存在が提起されるようになる。そしてここでは、運営する市民や団体、そして利用者との間に、市場の理論を超えた豊かな関係性が育まれていくようだ。こうした、新しいコモンズをつくり出す動的なプロセスとしての「コモニング」が果たす役割とその可能性について、有識者のお二人に語り合っていただく。

コモンズへの世界的関心の高まり

小泉　いまコモンズは、日本国内だけでなく、世界的にも関心が高まっている傾向にあります。国内の文脈でいえば、東日本大震災からの復興が契機になっています。被災地の、とくに沿岸部は昔ながらの強い地域コミュニティをもっていましたが、それが津波被害で壊滅的な打撃を受け、人々も散り散りになってしまいました。そのなかでもう一度、以前とは違うかもしれないけれど、お互いに支え合えるような社会的な関係やそのための場所を取り戻そうという活動が、各地で、住民発意のなかで誕生してきた。それらをサポートしてきた我々専門家は、そういった活動のなかに、被災地だけではない、社会全体の課題となっている少子化、高齢化に伴う人口減少社会におけるコミュニティ、町のあり方に対するモデルとなり得るような可能性を見出したんです。つまり、市場経済のメカニズムのなかで、生活にまつわるすべてのサービスを賄うことはできない社会が、まさに現存していて、私たちとしてはそれに直面し、対峙しなければならない状況に置かれた。その時に、被災地のなかに誕生してきたコモンズ的なものが、以前とは異なるかたちではあっても、豊かなコミュニティ、社会的な関係性を再生していく様子を目の当たりにすることになったんです。そうしたことがきっかけとなり、被災地に限らず、コモンズ的なものが都市を再生するというアプローチが注目され、関心がもたれるようになりました。

一方、グローバルな文脈で言うと、大都市では所得格差の拡大があり、また地域間格差が生じてきたなかで、従来の市場経済のメカニズムでは都市には富裕層しか暮らせないといったような、都市へのアクセス性みたいなものが非常に問われるようになっています。その背景には、世界的な潮流として、1980年代からの新自由主義的な経済政策があります。マーケットをいかに都市に引きつけるか、大手の民間事業者にインセンティブを与え、その資本を活用しながら都市を再生していくといった政策が、日本だけではなく、アメリカでもヨーロッパでも、盛んに行われてきました。しかしコロナ禍を経て、そうした政策が大きく見直されるようになってきている。ヨーロッパの、とくにオランダのように都市計画が強固に機能してきた都市でさえ都市と地方の格差が生じ、都市を市場化してきたことを反省し、政策を見直し始めています。つまりそのなかでは、政府セクターの役割を見直すと共に、ノンプロフィットベースの取り組みを重視するようになっている。それがコモンズ的な、そして今回のテーマでもあるコモニング（コモン化）的なアプローチを都市のなかに埋め込んでゆく、といった取り組みです。こうした動きは、グローバルな文脈として共通していると思います。

そんなふうに、ざっくりコモンズがなぜ今注目されているのかという話があるなかで、我々都市計画分野の研究者がもっとも参照している基本的な図書の一つに、宇沢弘文先生（経済学者、1928―2014）が提唱された「社会的共通資本」があって、とくにコモンズを考えるうえでは、その時代を超えた重要性みたいなものに、改めて注目しているところです。

占部　父が最初に「社会的共通資本」という概念を日本に送り出したのは1970年代。簡単に言うと、資本主義が弱者を犠牲にすることが多いことから、それを避けるために社会的共通資本を構築しました。豊かな社会に欠かせないもの、たとえば、大気・森林・河川などの「自然環境」、道路・上下水道・電気・ガスなどの「社会的インフラ」、教育・医療・司法・金融制度などの「制度資本」といったものは、地域（共同体）や国で守り、市場原理のみで管理しないことが豊かな社会をつくっていくと考えていました。コモンズの存在は社会的共通資本を管理し運営していくために重要な存在と捉えています。私は今回の企画内容をうかがって、コモンズというある特定の場やこれを運営する共同体がある状態ではなく、コモニングという、動きのあるものとして捉えることが非常に面白いと思いました。

私は医者ですが、私がもっとも注目しているのは「健康」です。ただ、「病気」があるかないかという静的な「状態」ではなく、健康を「能力」、動的なものとして捉えたい。これはオランダ発の「ポジティヴ・ヘルス」という考え方で、健康は状態ではなく能力なのだ、と。つまり健康は、静止した状態ではなく動的なもので、たとえ、病気や障害があっても、周りのサポートを力に困難な状況に立ち向かう能力が保持されていれば健康と捉えようという考え方です。コモンズでも静的なものとしてではなく、コモンズにしていくそのプロセスを含めた動的なかかわりによってコモニングになるということに、とても興味を惹かれました。

小泉　確かに健康の話とも共通点がありそうです。おっしゃる通り、静的な状態ではなく、プロセスであることがコモニングの一番重要な点です。たとえば、政府や自治体が管理している公園などの公共空間は、ただその場所があればコモンズになるわけではなくて、そこにさまざまな人たちが関与し、また巻き込んでいくことによってコモン化されていく。つまり、コモニングとは、ある特定の場所にいろいろな人々にとっての意味を与えていくプロセスです。特定の場所をコモン化することで、さまざまな社会的な関係を構築するとか、孤立しているものを取り込んでいくとか、まさに動的に、そういう社会的な状況をつくり出していくものだと思います。

ローカルな社会的共通資本を分析する

占部　日本的なコモンズというと主に林業にまつわる「入会地」がイメージされますが、森林ってそもそも私的な所有地が多いですよね。父は社会的共通資本において、公的な性質を帯びているけれども私的所有が許されることに非常に意味があるとしています。森林は私的所有地であることが多いにもかかわらず、自然環境はもちろん、山の麓の住民の生活環境にとっても大きな影響がある場所で、公的な部分もとても大きい。麓の人々の安全性や河川や海の環境を考えずに、私益だけで伐採してしまうことはできない。山を管理している人々は麓の町の人々のことにも配慮しながら自分たちの事業を回していくということをしてきた。同じように病院も、公的な意味合いが強いものですが、日本の病院の7割が私立で、ある程度の自由が担保されている。公的、私的両方の特性があることが大切で、今おっしゃった公園も、利用者がうまく活用して楽しくコモニングすることもできるけれど、公的な管理が強すぎるとコモニングされることはない。両方が対等なバランスを保つことが大切なのでしょうね。

小泉　自分たちの行動が、閉じないことが大切です。人との関連、場所ごとの文脈を読み解きながら利用していく。また、その場所をコモン化したときに、その恩恵を受ける人たちの存在がどうあるのかといったことを、丹念に分析する必要がある。それはスタティックな分析ではなく、たとえば、オーラルヒストリー的に地元の人たちに話を聞く会を開いて、いろんな人と対話しながら地域の課題を掘り起こしていったり、発見したりという、実践的なものであるべきです。そのうえで少し社会実験的な試みを行い、そのレスポンスを見ながらさらに取り組みを進めていく。一度コモンズをつくったらおしまいではなく、入れ替わり立ち替わり、いろんな人がかかわりながら常に動的、あるいは生成的に取り組んでいくというのがコモニングのイメージかと思います。

占部　具体的な地域や自治体に置き換えるとどんな感じかなとイメージした時、一つ、小布施町（長野県）が思い浮かびます。私は2024年に、小泉さんも携わっておられる「ミライ構想カレッジ in 小布施」※にゲスト講師として呼んでいただきましたが、まちづくりの先進地と呼ばれているだけあって、住民のみなさんがそれぞれの立場で創発的にまちづくりに取り組んでいると感じました。また2025年1月には大宮透さんという、30代の若い町長が就任されて、いかにも、若い町長と共に伸びていく町というイメージを抱きます。それまでの町の歴史があったから、大宮さんが選ばれたんですよね。

小泉　大宮くんは僕の教え子で、大学院生の時から小

こいずみ・ひでき
1964年、東京生まれ。東京理科大学理工学部建築学科助手、東京大学工学部都市工学科講師・助教授・准教授を経て現職。専門はコミュニティ・デザイン、協働のまちづくり、市民主体のまちづくりなど。編共著書に『縮減社会の管轄と制御』（法律文化社、2024年）、『コミュニティデザイン学: その仕組みづくりから考える』（東京大学出版会、2016年）、『東日本大震災　復興まちづくり最前線』（学芸出版社、2013年）など。

うらべ・まり
医師。経済学者・宇沢弘文氏（1928―2014）長女。東京慈恵医科大学卒業、1992～1994年にメイヨークリニックポストドクトラルリサーチフェロー。現在は地域医療の充実を目指し内科医として勤務。2014年、宇沢国際学館取締役に就任。この他、日本メメント・モリ協会代表理事、日本医師会国際保健検討委員。JMA-WMA Junior Doctors Network アドバイザー。国土緑化推進機構森林SDGs研究委員など。

布施を拠点にして、小布施若者会議やHLAB OBUSEなどの取り組みを仕掛けてきた人です。僕自身は外からかかわっているだけですが、確かに小布施はすごく面白い町ですよね。遡れば江戸時代には葛飾北斎をパトロネージュして北斎の活動を支えると同時に北斎のナレッジを地域の共通資本化していくということをやってきたという歴史もある。それだけに、新しいものを受け入れる寛容さや開放的な文化性が歴史的に育まれてきているのかもしれません。まさに、宇沢先生が言った社会的共通資本のようなもの……地域に根ざした、明示的に定義できないような社会関係やある種の暗黙知が存在しているのではないでしょうか。小布施はそういう文脈にうまくリフレクトされている自治体だといえそうです。

占部　確かに、社会的共通資本というのは、その町、その場所、その歴史と共にあるもので、父はたとえば、博多の屋台も社会的共通資本だと言っていたことがあります（笑）

緩やかな関係性をつくる

占部　人って何かがうまくいくと変化が怖くなるというのか、組織がだんだん固まってきてしまう。我々のテリトリーはここで、このメンバーでやっているからうまくいくのだ、と。さまざまな人に開く、違うメンバーを受け入れるというのは、なかなか難しいようにも思います。

　このような状況に関連し、医療の立場から気になっていることに自殺、とくに若年者の自殺の増加があります。その背景にはさまざまな社会的要因がありますが、逆に、自殺者の少ない地域には、人と人との緩やかなつながりがたくさんあるという調査結果があります。日頃、挨拶はするけれど、何をしている人なのかは知らない、という程度の緩さ。そういう緩さを継続することがすごく重要だと思うのですが、場合によっては、コモニングだからと一所懸命活動していると、その中心の人たちの結束が強くなって、そうでない人たちは排除されていくということが生じ得ないでしょうか。

小泉　かつて「コモンズの悲劇」で捉えられていたようなコモンズ、入会地もそうかもしれませんが、昔ながらの農村・漁村で自分たちの生活を支えるために不可欠な収益の場としてのコモンズの場合にはそういった強固な結束も必要かもしれません。ですが、コモニングによって築かれるのは、その強固な紐帯から漏れてしまっているもの、そこにある社会的な課題に対応できるような、開放的なネットワーキングです。都市のなかで徹底的に分断されてしまって、アトム化しているような状態の人たちに、さまざまな関係性を生み出していく。それがコモニングの目的ですし、また、場所と結びついているということも大事なことで、まさにサードプレイス的な、家庭（ファーストプレイス）や職場（セカンドプレイス）以外の第三の居場所になり得る。ですから、活動に中心的に取り組んでいる人たちも、この活動を100年続けるぞ、と意気込む必要はないし、状況に応じて、活動の必要がなくなれば一時的に休んでもいい。それよりもむしろ、何か課題が発見された時に、リアクティブに、コモニング自体が生まれるような状況こそが大事で、そこではコモンズのあり方自体が常に問われていく、チャレンジされていくことになると思います。

占部　日本的な人間関係や組織のあり方には、ホルモンが関係していることもお話ししておきたいと思います。一般に「ハッピーホルモン」と呼ばれる、幸福感と関係している脳内物質にセロトニンがあって、日本人は、このハッピーホルモンの運び手であるたんぱく質「セロトニントランスポーター」の使い方に特徴があり、どうしても心配しがちなのです。「何かあったらどうするの?」と、その「何か」が何なのかがわからないけれど、なんとなく不安感を抱えてしまう。セロトニントランスポーターというたんぱく質の形から、日本人の約7割が、そういった傾向をもっているといわれています。

　またオキシトシンというホルモンもハッピーホルモンの一つで、これは、ハグをしたり、マッサージされたりと気持ちがいいと感じた時に出ていることがあるのですが、マッサージしている方にもオキシトシンが出ています。ただ、オキシトシンはすごく強固な関係性をつくるので、オキシトシンで結ばれすぎてしまうと、グループ外の人に対して攻撃性が上がってしまうのです。

　だから、たとえば新しいことにチャレンジするような時に抱く不安や心配が、本当に課題があって不安なのか、単に遺伝子的に不安なのか。また、グループの流動性などについても、ホルモンなどの脳内伝達物質の関係に自覚的になると、コモンズもコモニングも、うまくいくことがあるのではないでしょうか。

小泉　それは面白いですね。コミュニティの研究にすごく役立ちそうな気がする。マッサージされたらお互いにオキシトシンが出ているという話も、コモニングの根源にかかわっているような気がします。

占部　先ほど小布施の話をしましたが、父が田中康夫県政時代に長野県総合計画審議会の座長を務めていたことがあって、その時にまとめた最終答申「未来への提言〜コモンズからはじまる、信州ルネッサンス革命〜」のなかで、1980年代のヨーロッパの都市が「量」ではなく「質」を競い始めた、と書いているのです。「量」を競っている時には争いが生じるけれど、「質」を競い始めると幸福が生まれる、そして、その「質」は「美しさ」と置き換えても良い、と。父が「美」に言及しているのは珍しかったので印象に残っているのですが、この「美しさ」という感覚、人は、視覚的なものだけではなくて、音楽が美しいとか、詩が美しいとか、心が美しいとか、多様な美しさを感じます。しかしそのいずれも、頭の中で興奮するところは一緒なんです。眼窩前頭野という、額の中心にあたる位置。どうやら人は、倫理といったものも同じ部分で考えているらしい。そうすると、美しいものを感じることと倫理的な行動というものは、すごく密接な関係にあるといえそうです。今回の話でいえば、コモニングのなかにどのような美しさを見出していくことができるのかがポイントになるのではないでしょうか。たとえば、誰か1人に負担をかけているのかどうかというような心の中の調和性も、美しさのなかに見出すことができる。1人に負担がかかるということは、その人たちの能力が流れずに澱んでしまっているので、そこをうまく流し、循環させていく方が、美しい感じがしますよね。だから今後、美意識を鍛えていくということが、すごく重要だなと思っているのです。

小泉　今日は触れられませんでしたが、とくにグローバルな文脈でコモニングを考えたときには自然環境や気候変動なども非常に重要なテーマになってきます。いずれにしても、さまざまなことをトータルに、コモニングのなかで考えていく必要があるし、それを可能にする概念だと思います。まさに人の循環もあれば、物や環境、自然の循環なども含めて。それは結局、美しさを考えることなのかもしれませんね。

東日本大震災をきっかけに誕生したコミュニティカフェ「りくカフェ」（関連記事：p.22）

農のある地域の魅力を発信する「タルキプロジェクト」（関連記事：p.12）

※ミライ構想カレッジ in 小布施/2024年8月、長野県小布施町・東京大学・NTT東日本が連携し、人口1万人の町から2050年の未来を描く実践型プログラムを実施。2050年の日本社会のミライを構想・創造していくミライ構想型のカレッジとして、2024年10月にスタートした。https://mirai-college-obuse.com

ケース
スタディ

開き、つながるコモニング

市民や地元の事業者らの自主的なかかわりにより、独創的で開かれた、インフォーマルでローカルな、小さなパブリックスペースが各地に誕生している。それらは、従来「閉じる」ことでしか成功しないとされてきたコモンズが、不安定で可変的な「関係性」を受け入れる「開かれたコモンズ」として存在しているようだ。コモン化（コモニング）された空間の誕生プロセスや運営方法、利用者も含む人々のかかわりとまちづくりに対する効果などについて、現地を取材する。

取材・文：村田保子（p.08～15、p.18～21）／斎藤夕子（p.22～25）　photo：坂本政十賜（※特記のないもの）

エリア内にある私道も深野さんの土地だが、自由に往来できる通路として開放。パーゴラや植栽を整え、連続性をもたせている

1 ニシイケバレイ

東京都豊島区

都心の谷間に息づく、顔の見える関係

中心にあるカフェ「Chanoma」は行列必至の人気店。豊かな植栽に囲まれ、待ち時間も心地よく過ごせる

商業施設や交通網が整えられ、利便性が極まっていく都心の一角で、人と人の顔の見える関係をつなぎ直そうとしている場所がある。ディベロッパーや行政がかかわらない、所有者の個人的な行動と、それに共感する人々のかかわりによって、少しずつかたちづくられていく共有の場。池袋駅から徒歩5分の立地にある「ニシイケバレイ」で起こっている場づくりは、都市のコモニングの可能性を感じさせる取り組みだ。

高層ビルが並ぶ駅前の大通りを1本入ると、豊かな植栽と入り組んだ路地、規模やデザインの異なる建物が並ぶニシイケバレイがある。この地は江戸時代から17代続く深野弘之さん一家が所有するもので、2020年頃の相続をきっかけとして、複数の建物を段階的にリノベーションしながら、カフェ、飲食店、コワーキングスペース、シェアキッチン、集合住宅などが集まるエリアとして整えられた。

中心になっているのは、築70年を超える木造平屋をリノベーションしたカフェ「Chanoma」。この平屋は、深野さんの祖父が戦後に建てたもので、かつては、深野さん家族の住まいだった。空襲を免れて残った屋根付きの門はさらに古い時代のもので、風情ある平屋や路地の雰囲気も相まって、懐かしさと温かみを感じさせる。開発が目まぐるしく進む池袋駅至近に、このような場所が残っていることに驚かされる。

共感する仲間とのチームによるプロジェクト

この一帯は、周囲に建つタワーマンションなどの影響で、強いビル風が吹き抜ける。「ここは風の谷だ」と家族で話していたことから、ニシイケバレイと名付けた。

深野さんは、父親から引き継いだアパートなどの賃貸物件を、単に修繕したり建て直したりするだけではなく、町に開いた顔の見える関係がある場所をつくることで、不動産としての価値も向上し、周辺物件との差別化につながると考えていた。そのために、建築関係者が集まる勉強会や豊島区で活動するさまざま人を紹介する「としま会議」などに参加し、多くの地域プレイヤーとつながり、ユニークな活動の数々に刺激を受けた。なかでも、兵庫県で同じように大家としてローカルコミュニティをつくることに取り組んでいた、Damaya Companyの木本孝広さんとの出会いは大きかった。

「木本さんもニシイケバレイと同じくらいの規模のエリアで、INNO TOWNという住む人が自分たちらしく暮らせる小さな町のようなコミュニティをつくっていることを知り、すぐに見学に行きました。木本さんに相談しているうちに、チームを組んで一緒にプロジェクトを進めていくことに。複数の建物が私道でつながっている特徴を活かしながら、エリアとしての統一感を出して町に開いていく方向になり、建築家の須藤剛さんにもチームに入ってもらい、一棟ずつ状況を見ながら用途を検討してリノベーションを進めていきました」と深野さん。

ニシイケバレイのオーナーの深野弘之さんとコミュニティマネージャーの小林鈴奈さん

2020年の「Chanoma」オープンから始まり、2階建て木造アパート「白百合荘」の1階を池袋で人気の和食店「わく別誂」が入るテナントに、2階をシェアキッチンとコワーキングスペース「Attic」に。RC造の賃貸マンション「コーポ紫雲」の1階の一室を店舗兼住宅にリノベーション。2025年3月には駐車場だったスペースに、新築の「TELAS」も竣工した。「TELAS」は地上3階建てのRC造で、賃貸集合住宅9戸と、1階にデリカとお酒の店「PŪL」、パルクール※＆アスレチックジム「PLAY STREET」、シェアスペース「3rrrd」が入る。さらに父親の代に建築した大通り沿いに建つRC造14階建ての賃貸マンション「MFビル」も含め、ニシイケバレイには約100世帯が暮らしている。

リノベーションでは、建物に統一感をもたせるため、敷地内で出た建具などの廃材を転用するなど共通のデザイン手法を取り入れ、建物と私道を隔てる外壁を撤去し、植物の拠り所にもなるパーゴラを設け、ベンチを配置するなどして、エリア全体を豊かな環境として連続性をもたせる工夫が施された。

血が通った関係や手触りのある風景

深野さんが、ニシイケバレイで目指しているのは「顔の見える関係」をつくること。集合住宅の住民や近隣住民が、顔見知りになり、会えば軽い挨拶や会話が自然と生まれるようなコミュニティを理想としている。こ

※パルクールは、フランス生まれの、走る・跳ぶ・登るなどの「移動動作」で心身を鍛える運動方法。街や森で、自由にスタートとゴールを決めて、障害物を越えることで体を鍛える（日本パルクール協会ホームページ参照）

「TELAS」の1階にはデリカとお酒の店「PÜL」、パルクール＆アスレチックジム「PLAY STREET」

2025年3月に竣工した賃貸集合住宅「TELAS」の1階には、オープンスペースがあり、マーケットやワークショップなどのイベントを開催している

「TELAS」に住む日神山晃一さんのワークスペース

2階建て木造アパート「白百合荘」。1階は和食店「わく別誂」、2階はシェアキッチンとコワーキングスペース「Attic」

の思いの根底には、前職で有機栽培野菜の流通に携わり、自身も八百屋さんとして野菜を販売する仕事をしていた経験があるという。有機栽培野菜の流通でも、農家と消費者の顔の見える関係づくりの必要性を感じ、情報発信やイベントなどの重要性を実感していた。大家業にもその経験を活かしていくことで、自分らしいコミュニティをつくっていくことができると考えたようだ。

また、祖父や父親の代にこの地で育まれてきた近所づきあいや程よい距離感の心地よさを、今の時代に合わせて継承していきたいという思いもあった。

「昔はご近所同士の助け合いは当たり前で、醤油の貸し借りをしたり、親同士が協力して子どもを見守ったり、自治や共助の精神を町の人たちが共有していました。私たちの世代は、そんな環境で育ち、子どもの頃は多様な大人に囲まれて、安心して成長することができたと思います。今は何かあれば行政や福祉に頼るようになり、生活は成り立つかもしれませんが、どこかに寂しさが残ります。ご近所というコミュニティの関係が希薄になることは、社会的な孤立にもつながる。大家として自分が管理している場所だけでも、血が通った人間関係や手触りのある町の風景を残していきたいし、それを継承しないのはもったいないと感じています」

深野さん家族も現在は「TELAS」に住んでいる。土間には深野さんの書が飾られている。竣工時のオープンハウスでは、この土間で茶を点ててゲストをもてなした

グラデーションのある関係人口

新築で建てた賃貸集合住宅「TELAS」の様子を見れば、ニシイケバレイで深野さんがつくろうとした「顔の見える関係」が実現されていることがわかる。9戸の住居には共用部の通路に面した土間が設けられ、アトリエや小商いなど住み開きができる間取りになっている。ニシイケバレイのプロジェクトにインテリアデザイナーとして参加している日神山晃一さんも、「TELAS」の住民であり、玄関に隣接する土間をオフィスとしている。住みながら町と少しかかわることで、住民同士の距離は自然と近くなっていく。

また、「TELAS」の1階のエリアでは、マーケットやワークショップなど、コミュニケーションが生まれるイベントを定期的に開催している。2025年の年間スケジュールは、ヨガフェス、縁日、陶器市、収穫祭、餅つき。一昔前に地域住民の自治で提供されていた、縁日や餅つきが計画されているところに、深野さんの思いが込められている。

「コーポ紫雲」の一室を店舗兼住宅にしたのも同じ理由から。現在は、器などを扱う「うつわbase FUURO」が入居しており、秋には陶器市の開催を企画してくれる予定だ。また、カフェ「Chanoma」、シェアキッチン、コワーキングスペース「Attic」を深野さんが自ら運営しているのも、さまざまな距離感でニシイケバレイにかかわる人を増やし、賑わいや活気が適度に継続するようにコントロールしていくためだ。

とはいえ、ニシイケバレイは、住民のための暮らしの場であると同時に、町に開かれた場所でもある。現在「Chanoma」は人気カフェとなり、イベント時にはニシイケバレイに多くの人が訪れる。「Chanoma」が人気になり過ぎたことで、住民や近隣の人たちが気軽に活用できなくなったため、営業時間後に茶道教室や味噌づくりなど、和の文化を通じて、地域の人がつながる機会を定期的に設けている。このような運営の工夫により、多様な人々がかかわるグラデーションのある関係人口を築いていることも、ニシイケバレイの魅力につながっている。

無理せず楽しみながら、次世代へとつなぐ

「イベントには講師を招くこともありますが、誰にでも場所を貸すわけではなく、ご縁のある方にお願いしています。テナントの飲食店も、私が好きで通っていた店ですし、パルクールジムもニシイケバレイ開業の年から一緒にコミュニティをつくってくれていたパルクール指導の専門会社に入居してもらいました。ライフワークとして取り組んでいるので、好きなことや興味のあることをやっていくのが基本方針です。大家もそれぞれの個性を発揮したほうが、オリジナリティのある場所が増えて、町も楽しくなるのではないでしょうか」と深野さん。

毎月発行している「ニシイケバレイ通信」は全住戸に配布。リソグラフで印刷して手触り感のある温かみを大切にしている

ニシイケバレイのコミュニティマネージャーとして、深野さんのサポートをしている小林鈴奈さんも、「Chanoma」でのヨガイベントの開催やパルクール教室の受付などでニシイケバレイにかかわっていたことから、仕事を任されるようになった。今後小林さんは、「TELAS」の1階にオープンしたシェアスペース「3rrrd」に常駐する予定で、誰もが気軽に立ち寄れる「町のサービスエリア」のような場所を目指し、住民や来街者とお茶を飲んだり、話し相手になったりすることで、困りごとや相談などを自然に引き出し、人と人をつなげて助け合いを支援するきっかけをつくっていければと話す。

「かかわっている人は、皆この場所が好きだから、ここに身を置くこと自体が楽しく、自然と場所への愛着が芽生えるのだと思います。植栽の手入れを担当している方やMFビルの管理や清掃を担当している方も、この場所がとても好きだから仕事が丁寧で、エリア内は常にきれいに保たれています。住民の子どもたちのことも気にかけてくれて、穏やかで温かい交流がいろいろなところで生まれています」と小林さん。

深野さんも周囲の人々も、フットワーク軽く、この場所をつくることを楽しんでいる様子が伝わってくる。気づいたらかかわっていたという巻き込む力の強さも感じさせる。「無理はしない。楽しみながら持続的にやる。そして次世代によいかたちで引き継ぎたい」と話す深野さん。

所有者としての責任を担いつつ、所有を超えて長い時間軸で、町の一部としてのニシイケバレイを包括的に見守るその姿勢が、地域と共有する場を自然に育んでいるように感じられた。

ケーススタディ

2

タルキプロジェクト

東京都東久留米市

地域に必要な農、本、人をつなぐ拠点群

タルキの造作棚が並ぶ「MIDORIYA」の店内。地域団体が使うイベントスペースとしても活用されている

東京都西部、東久留米市で進められている「タルキプロジェクト」は、地域の遊休不動産や農業資源を活用し、公共性のある場づくりを通じて人や資源の循環を促す取り組みである。2017年から8年にわたり継続しており、これまでに六つの拠点が整備されている。

プロジェクトの始まりは江戸時代からこの地域で400年続く農園「奈良山園」オーナーの野崎林太郎さんが、学生時代の友人である設計事務所「IN STUDIO」の小笹泉さんとパートナーの奥村直子さんに「商店街の空き店舗をなんとかしたい」と相談したことだった。この店舗は昭和の団地と共に栄えた菓子店が閉店し、空き店舗となっていた。野崎さんは子どもの頃から親しんでいた滝山商店街の元菓子店の空間を活用し、農産品やジャムなどの加工品を製造・販売することで、地域の農業を発信する拠点をつくりたいと考えていた。ただ、この時点では野崎さんも小笹さんたちも、プロジェクトの構想や計画があったわけではなく、活動がこんなに長く継続し、拠点群として広がっていくとは想像していなかったという。

滝山団地商店街の空き店舗を改装した「MIDORIYA」。前にバス停があり、軒下にはベンチを設けバス待ちの方が座れる場所に

タルキを使った六つの拠点群

空き店舗の改装は、通常の施工であれば一桁足りない低予算が条件だった。そこで、小笹さんたちが知恵を絞って導いたアイデアが、30×40mmの木角材を使ったセルフビルドによる施工だ。小笹さんたちが「タルキ」※と呼んでいる30×40mmの木角材は、ホームセンターなどで誰でも安価に入手でき、細く軽量で運搬も加工もしやすい。

空き店舗の改装は、既存の構造体やサッシに合わせ、タルキで格子やルーバーをつくり、屋内外の可動什器もすべてタルキで組み立てた。井桁状に加工されたタルキは、空間の統一感と洗練された印象をもたらす。この第一弾の拠点を、元の菓子店の屋号を引き継ぎ「MIDORIYA」と名付けて運営が開始された。

自身やスタッフが中心となってタルキでのセルフビルドを経験したことが自信となり、自分たちでつくれる実感をもった野崎さんは、小笹さんたちと共に次々とタルキを使ったセルフビルドによる施工を進めていく。運営している果樹園や畑に隣接する空き地を活用し、必要性に迫られていた無人直売所やブルーベリーの収穫体験の受付「畑テラス」、果実を使用したドリンクを提供するスタンド小屋をつくり、畑の中の複合施設「ブルーベリーセンター」を順次整備している。タルキを構造体とした二つの小屋は、タルキプロジェクトの方向性を示す象徴的な存在となった。

「奈良山園」オーナーの野崎林太郎さん（左）、設計事務所「IN STUDIO」の小笹泉さん

農園に隣接する空き地につくった「畑テラス」。完成当初は農作物の無人直売所、現在ではブルーベリーの収穫体験の受付として使われている

収穫体験のシーズン中は、果実を使ったドリンクを提供するスタンド小屋。シーズンオフは農作物の加工場として使っている

また、野崎さんの両親が始めた二つの書店も同じ手法で改装することに。この書店は農園と共に野崎さんが継いだ事業で、昨今の出版不況もあり、売り上げが落ち込み、在庫量や陳列量を時代に合わせて整理する必要があった。東久留米駅前の「野崎書林」は、3分の1の面積をマルシェに改装して、約30軒の地域の農家と個人の店舗と連携し、農産品や加工品を委託販売。1日あたり約4万人の乗降者数がある東久留米駅で、通勤通学途中の若い層に地域の農産物を紹介する拠点としての役割を果たしている。また、滝山団地商店街にある「ブックセンター滝山」は、約100坪の郊外型大型書店で、ニーズに適応させるため、売り場を圧縮・再構成して、B to B業務のバックヤードを拡充した。二つの書店内の壁や什器にもタルキがふんだんに使われている。

さらにタルキプロジェクトは、新築で建設した福祉施設「デイサービスアルゴ弐番館・四番館」へと拡張。この事業は、農地の相続時に宅地化を余儀なくされる状況で、少しでも畑を残しながら地域に必要な施設を

※「垂木」は一般的に建築の小屋組構造材を指す。小断面の木角材のことを垂木と呼ぶことも多く、このプロジェクトでは30×40mmの木角材を「タルキ」と表記している。

東久留米駅前にある「野崎書林」のマルシェスペース。地域で採れる農産品を新鮮なうちに地域の人に届ける拠点となっている

マルシェスペースの什器には、サイズや入れるものに合わせて野崎さんやスタッフが自作した木箱が並ぶ

滝山団地商店街にある「ブックセンター滝山」。高齢者が多い団地の書店需要を支えている。DVDレンタル店、クリーニング店も併設

福祉施設「デイサービスアルゴ弐番館・四番館」。南側はオープンキッチンがある一日型、北側はリハビリ中心の半日型。二つの事業所が一体となった空間に共存。壁をタルキを使った吸音ルーバーパネルで仕上げている

野崎さんが管理する別の敷地内にあった元カーポートを移設して活用した作業スペース。必要に応じてタルキで棚を造作

「デイサービスアルゴ弐番館・四番館」の畑。利用者が主体となって野菜などを栽培。道具の収納やベンチなども自作されている

つくりたいという思いから、地域で志を共有する事業者に運営を任せて協働することで実現した。一角に畑を残すことで、農、福祉、住宅地をつなげる場として展開している。

六つの拠点群はそれぞれの場所で、地域の農家、住民、施設利用者が農を触媒として小さなつながりを生み出し、「畑テラス」「ブルーベリーセンター」は援農ボランティアや収穫体験者など、外からやってくる人たちを受け入れる場にもなっている。これらの拠点は「人、もの、こと」の地域資源を共有し、循環させる小さな経済圏として育ちつつある。

使い手による建築の拡張

タルキを用いたセルフビルドの拠点づくりでは、建物をつくる度に野崎さんやスタッフに施工のスキルや知識が蓄積され、小笹さんが知らない間に、小屋がつくられていたり、棚が増えていたりと、使い手によって建築が拡張していく現象が起こっているのも面白いところだ。

農園の敷地の余白にはパーゴラ下の休憩所、鶏小屋、採蜜所など、セルフビルドによる場が次々に増殖しており、使い手による拡張性が顕著に発揮されている。

福祉施設でも、利用者が畑で農作業がしやすいように道具の収納を自作するなど、建築が使い手によってアレンジされており、取材時に久しぶりに訪れた小笹さんも驚いていた。

「一本一本のタルキは弱く、曲がっていて、色も不揃いですが、組み合わせることで強くなり、精度が上がり、端正な見た目になります。タルキを使った同じ工法を何度も繰り返すことで、拠点群としてデザインに統一感が出ると共に、次のプロジェクトでは精度が上がり、より大規模な拠点整備へと踏み出せるようになっていきました」と話す小笹さんは、このプロジェクトを「小さな実装とテストを繰り返して知見を高めていくアジャイル開発、または、始まりも終わりも範囲も曖昧なオープンソースのOSのようなもの」と表現し、既存の建築設計の枠組みから開放された取り組みだと捉えている。

スタッフが共に場をつくり立ち上げる経験は、かかわる人たちが場を共有していくプロセスでもある。使い手自身が手を加えることで、建物はその人たちの場として育ち、暮らしや活動に応じて日々アップデートされていく。

地域の豊かさにつながることをやる

一本一本は非力な木角材でも、組み合わせることで強くなるというタルキの特徴は、野崎さんたちが取り組んできたタルキプロジェクトの思想と重なっている。それぞれの取り組みは小さなプロジェクトでも、同じ工法によるセルフビルドを繰り返すことで、拠点群としての存在感を強め、地域に「何か面白そうなことが始まっている」という期待感を生み出している。

完璧を目指さず、とりあえず行動する。手を動かしてつくり、場所を運営していくことで、次に必要なものがわかり、プロジェクトの目的が明晰になっていく。六つの拠点の整備を経て、野崎さん自身の場づくりのビジョンも着実にかたちを帯びつつある。

「〈奈良山園〉では、地域の豊かさに貢献することをミッションとして、事業展開の指針としています。自分たちが住んでいる地域には課題がたくさんありますが、解決方法がビジネスの収支構造で考えられると、コストや手法が優先され、〈なぜやるのか〉という本来の目的がかすんでしまう。課題と場所があるとき、それがうまく活かされていないのを見ると、もどかしさを感じてしまいます。もともと農家にとって、農産物を売ることは生業の一つで、農産物以外も必要なものは自分たちでつくり、地域で役割を分担しながら、自治を支えてきました。祖父母や両親から学んだ地域への責任が自分にもあるのだと思います。場所と人との接点がつながり、それが地域の豊かさにつながることであれば、やってみる価値はある。そんな思いで、一つずつかたちにしてきました」と振り返る野崎さんの言葉には、自らの手で場を築いてきた確かな実感がこもっていた。

農地を残すモデルケースをつくる

今年40歳の野崎さんと小笹さんは、同世代に共通している危機感が行動につながっているとも分析している。事業を引き継いだものの、親世代ではうまくいっていた制度が事業面で立ち行かなくなり、そのままの制度では継続が困難になっている。これまでの制度を変革して、ニーズに合った新たな制度をつくっていく必要にも迫られている。タルキプロジェクトの説明をするとき「野菜と特産品を売っている本屋さん」といった長い文章になるのは、まだ固有名詞も制度も存在しない領域に挑戦しているからである。

「東京都西部は、都市のなかに住宅地と農地が共存しており、世界的にも希少な環境だとされています。しかし、引き継ぐ人が、相続の税制をそのまま受け入れると、税の圧力により農地はあっという間に宅地に変わっていく。何もしないと、前例を引き継いで投資する仕組みにブレーキすら踏まれない状況です。だから、タルキプロジェクトが人とものと価値を循環させて、農地を残していく一つのモデルケースとして認知されるといいなと思います。地域に必要なことはそこに住む人にしかわかりません。同じことをしてほしいわけではなく、こういう選択肢があることを知ってもらいたいのです」

そう話す野崎さんは、事業に責任をもったかかわり方をすることも大切だと考えているという。農業も書店も公共性のある業種だが、民間企業が運営する以上、雇用を生み出し、同じ志をもつ人たちと、持続可能な収益を得るビジネスモデルをつくって前進していく必要がある。

タルキプロジェクトのような活動は、制度の枠組みに収まりきらない実践だが、地域の資源を活かし、必要なものを持続的に運営していく取り組みであり、地域の人たちからも求められている。援農ボランティアや収穫体験など、農に興味をもつ層に、本格的な農とかかわる接点も提供している。援農ボランティアや収穫体験は、「奈良山園」にとっても、年間数百人単位の協働力であり、互いに支え合う関係として根付きつつある。

目に見えづらいが、拠点群のスタッフや地域の人々、農家仲間、その他周辺の関係人口が支えるコミュニティの価値は、さらに注目されるべきだと感じる。多方面にかかわりの余地を設けているタルキプロジェクトのコモン化は、今後もさらに広がりを見せていくに違いない。

野崎さんは、将来的に行政や地域団体ともっと協働できる体制が整えば、よいかたちでプロジェクトを持続できると考えている。福祉施設の事業者との協業のきっかけは、行政も参加する地域のまちづくり協議会であり、その兆しは見え始めている。地域を豊かにしたいという目的は行政も民間も変わらない。互いの力を活かし合う協働が、ここから育っていくことに期待したい。

飯田美樹

コモニングで「インフォーマル・パブリック・ライフ」

街のデザインは、私たちの想像以上に人の行動や感覚に影響を与えているものである。こんな街にはいたくない、この街にはなぜか惹かれる、そんな「なぜだかわからないけど、そう感じてしまう」というのは、単なる文句や気分ではなく、そう感じる理由があるからだ。カフェ文化やパブリック・ライフを研究する飯田美樹さんは、そのヒントがインフォーマル・パブリック・ライフではないかと考えている。コモニングにも通じるインフォーマル・パブリック・ライフとは何か、またそれはどのような意味、意義をもつものなのだろうか。

photo:坂本政十賜

いいだ・みき
カフェ文化、パブリック・ライフ研究家。リュミエール代表。1960年神奈川県生まれ。早稲田大学商学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了。著書に『インフォーマル・パブリック・ライフ人が惹かれる街のルール』（ミラツク発行、英治出版発売、2024）、『カフェから時代は創られる』（クルミド出版、2020）、他

インフォーマル・パブリック・ライフはどこにあるか

……コモンという概念に直接言及しているわけではありませんが、飯田さんがいう「インフォーマル・パブリック・ライフ」は、私たちの考える「コモンズ」あるいは「コモニング」ととても近い関係にあるんじゃないかと思います。

「インフォーマル・パブリック・ライフ」は、一言で言うと、気軽に行けて予期せぬ誰かや何かに会えるところです。そこに行ったら何か面白いことが起こっているかもしれないという期待がもてる場所だと思います。そこでは人がリラックスしていて、いつ行ってもよく、どれだけ長い時間過ごしていてもかまわないような場がインフォーマル・パブリック・ライフです。では、よくいわれる「サードプレイス」とは何が違うのか。一番大きな違いは、サードプレイスは入るのにお金がかかるということです。たとえば、今インタビューをしている帝国ホテルのラウンジがサードプレイスだとしたら、隣りの日比谷公園がインフォーマル・パブリック・ライフというイメージです。

……ご著書では、①朝から夜までどんな時間でも人がいる。②誰にでも開かれており、そこでゆっくりすることができる。③あたたかい雰囲気があり、一人でも、誰かと一緒にいるような安心感がある。④そこにいくと気持ちが少し上向きになる。⑤そこでは人がリラックスしてくつろぎ、幸せそうな表情をしていると。インフォーマル・パブリック・ライフを特徴付ける五つの視点をあげておられますね。

社会的コードから離れているというのが一番重要です。私はずっとカフェの研究をしていたんですが、とくにフランスのカフェは、社会のコードからちょっと離れたポケットみたいな場所です。社会的に要請されている役割から抜けた、本来の自分、いうならば第三の自分でいられる場があることがとても大切です。

ゆらぐ関係から第三の自分へ

……『city&life』では、ことあるごとに「開くことが重要だ」ということを強調してきました。物理的に空間を広げるなり、ドアをあけるなりして開いていくというのはもちろんですが、それと同じくらいにオープンマインドでいることが重要です。自分の気持ちが広がり他者の気持ちも広がる。そこでお互いが交流する。それが「開く」という意味なんじゃないかと。

その開かれる場には、さまざまな属性の人がいるということが大事で、同じ属性の人だけいるような場所で、いくら「開く」といっても意味がない。たとえば、オフィス街だと似通った人が来るわけですが、「えっ、こんな人もいるの?」みたいな衝撃を受けることがありますよね。それがすごく大事なんです。しかし、そういう場では、自分もゆらぎます。自分自身が非常に不安定になるんです。

……それこそインフォーマル・パブリック・ライフの特徴だと思いますが、社会的意義という観点ではどうですか。

一つはソーシャル・ミックスを促すことだと思います。そこには自分の属性と違う人たちがいる。自分とはまったく違う生き方があるということを肌で感じるということがすごく大事だと思うんです。二つ目は私がカフェセラピーと言っていることで、「そこを訪れた人の視点を変え、視野を広げる」ということですね。

たとえば、つらい気持ちを抱えて人に会ったとしましょう。その人は、私の悩みなど知るよしもないのでまったく違う話題を始めたりします。天気の話とか友人の話とか。そうすると、気持ちがそっちに引っ張られて、さっきまでの問題がちょっと小さくなるということがあるんですよ。

これはけっこう大事なんです。問題を抱えている人というのは、たいがいその問題で頭のなかはパンパンです。ところが、それとは関係ない話をしていると、100％頭のなかを占めている問題が、気づいたら80％ぐらいになっていたりするんです。20％の隙間ができている。その場所を出て行く時には、自然と問題が小さくなっているんです。

たとえばカウンセリングに行くと、私が問題を抱えていたら、それに対して100％向き合わざるをえないわけです。これはけっこうつらいです。過去の記憶とかもどんどん引き出されて、結局最後は泣いて終わるみたいな（笑）

でも、カフェセラピーはいわゆるプロがやる心理相談ではないので、天気の話とか「今日のコーヒーは美味しいわね」とか、そういう話をするだけです。だからいいんです。カフェに行ったり、銀座のようなキラキラした街を歩いていると、見ているものにつられて思考が引っ張られる。知らないうちに心が動いたりするわけです。かたくなだった心が、突然動き出すんです。

不安定な状態にい続けることはとても怖いことです。人は自分の属している世界で安住できれば楽ですから。

でも、それは私に言わせれば第二の自分、言い換えれば、社会が要請している「私」です。

しかし、自分にはもう一つの自分がある。家庭内の役割を背負った自分と社会が要請する第二の自分の他に第三の自分があるんです。ウィンドウショッピングをしている時、公園で飼い犬と遊んでいる時、あるいは公園のベンチに腰掛けて街並みをただぼうっと眺めている時も、そこにいるのは、おそらくこの第三の自分です。この本来の自分に戻れる場こそ、インフォーマル・パブリック・ライフです。

ケーススタディ

3

インフラスタンド

埼玉県所沢市

水道工事店がつくる、コミュニティを育む公共トイレ

行灯のように周囲を照らし、夜道を往来する人に安心感を与える（photo提供：石和設備工業）

住宅街に突如現れる、銀色に輝く円形の屋根に、半透明の波板の壁で構成される塔のようなシンボリックな建築物。高さは約5.6ｍあり、地域のランドマーク的な存在になっている。これは所沢市にある水道工事を手掛ける石和設備工業の敷地内にある公共トイレ。周囲には手洗い場、ベンチ、ハイカウンター、サイクルステーションが設けられ、日中は誰でも自由に使えるトイレとして開放されている。手入れされた植栽に囲まれ、ブランコが置かれ、ちょっと立ち寄りたい気分になる空間だ。トイレ内部は、毎日丁寧に清掃され、気持ちよく使える状態が保たれているうえ、棚には紙おむつや生理用品も備えられている。見上げると高い天井に、巨大なペンダントライトが設けられている。夜になると半透明の波板を透過した光が行灯のように周囲を照らし、夜道を往来する人に安心感を与える。

このトイレを中心とした「居場所」で、民間の水道工事店が地域とのつながりを確かめながら、コミュニティを形成しようとする取り組みから、コモニングがもたらす価値を考えていく。

住宅街にある町のランドマークのような存在。取材時は持ち込みイベント「よりみちインフラスタンド」が開催されていた

居場所として開かれたトイレ

「水道工事店は地下構造物を手掛けることが多く、つくったものが人の目に触れることは少ない。丁寧な仕事をしても評価がされづらいんです。そのなかでトイレは目に見える成果物であり、生活に欠かせない身近なインフラ。町に開かれた居場所としてトイレをつくることで、水道工事店の認知度やイメージアップを図り、人の交流のきっかけを生み出したいと考えました」

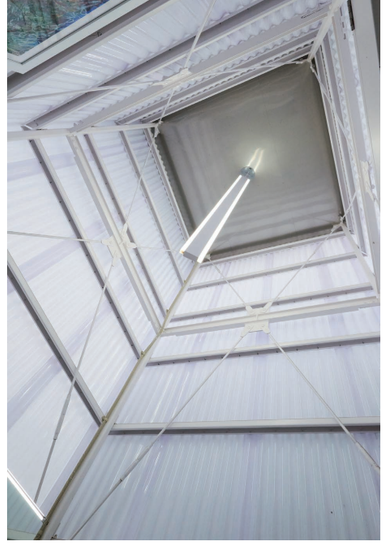
そう話すのは、石和設備工業代表取締役の小澤大悟さん。水道工事は社会にとって必要な仕事なのに、人材不足で定着率が低いという課題がある。業界全体として担い手減少の危機感が強く、若い世代に水道工事の仕事に興味をもってもらい、人材採用や定着につなげたいという目的が大きかったという。

設計を担当したのは、同じ所沢市を拠点とする建築家、シン設計室の高橋真理奈さん。小澤さんが、高橋さんが立ち上げていた所沢に私設図書館を開くためのクラウドファンディングに応募し、「建築にまつわる困りごとを相談できる」という返礼品から、このプロジェクトはスタートした。

「高橋さんからは、ただきれいなトイレをつくるだけではなく、人が集まって長く滞在できて、愛着が生まれるような新しいトイレの可能性を探ってみようと提案されました。それで一緒に都心の商業施設のトイレや〈THE TOKYO TOILET〉※の公衆トイレを巡りました。デザイン性の高いトイレがあることで、集客や売り上げ、従業員の満足度向上などにつながることがわかり、トイレには、機能以外にも役割や存在意義があると捉え直す機会になりました」

インフラスタンドを運営する石和設備工業代表取締役の小澤大悟さん

天井が高く開放的で明るいトイレ内部。いつも清潔に保たれ、棚には紙おむつなども用意されている



天井にはオリジナルで造作したペンダントライトを設置

「THE TOKYO TOILET」のトイレには、中庭やベンチなどが設けられ、立ち寄った人が一休みできる場所になっているものもある。当初は、自社や業界のブランディングのためにショールーム的にトイレをつくることをイメージしていた小澤さんだったが、高橋さんとのトイレを巡るツアーを経て、居場所としてのトイレや、コミュニティを生み出すことの価値を意識するように。高橋さんと議論を重ね、トイレを中心として、地域の人たちがゆるやかに集うことができる開いた場所にすることを決めた。完成したトイレは「インフラスタンド」と名付けられた。生活に欠かせないトイレを重要なインフラとして印象付け、それを守る水道工事店の存在に光を当てるメッセージが込められている。コンクリートの基礎が現しになっているのも、インフラを支える水道工事店を意匠として象徴する思いからだ。

インフラスタンドは、その名の通り、通りすがりの近

植栽が美しく整備され、コンクリートの基礎を立ち上げた手洗い場、ベンチ、ハイカウンターも設けられている

子どもたちは建物の構造物を遊具にして遊び、この場所を自由に使いこなしていた

余白にはブランコも

※「THE TOKYO TOILET」とは、東京都渋谷区内の17カ所の公共トイレを、世界で活躍する16人のクリエイターにより、生まれ変わらせたプロジェクト。映画『PERFECT DAYS』に登場したことでも話題になった。

隣住民、タクシードライバー、登校前や下校時の小学生など、日々たくさんの人々にインフラとして利用されている。保育園の散歩コースの途中にあるため、園児たちの休憩スポットにもなっているという。

イベントでつながる地域との関係性

インフラスタンドの完成後、小澤さんはこの場所を地域の人々と共有していくために、「KAWAYA市」というマルシェイベントを企画し、2022年から毎年開催している。近隣の人気飲食店やクラフト作家などに声をかけ、所沢市と連携して隣接する都市計画用地の使用許可を取り、15～20 ブースが並ぶ規模となっている。初回の2022年は、所沢市の社会実験「TOKOROZAWA STREET PLACE」、所沢発のクラフトマーケットと連携して同日開催することで、地域を回遊できるイベントとして、多くの人が訪れ、認知度が高まったという。2023年からは夜の時間帯にライティングパフォーマンスやライブも実施している。

「一般的なイベントの滞在時間は約30～40分と言われていますが、〈KAWAYA市〉は2～3時間滞在する人が多い。トイレが使える安心感もあると思いますが、それ以上に、居心地のよさが滞在時間の長さにつながっていると感じています」

小澤さんの奥さまが、近隣住民に手紙を書いて丁寧にコミュニケーションを取っていたこともあり、夜のライブでも苦情はなく、住民から「楽しい場所をつくってくれてありがとう」と感謝されることも。前面道路は許可を得て通行止めにして、警備員を配置するなど、安全対策にも予算をかけている。こうした細やかな配慮により、訪れる人々に安心感を与えると同時に、近隣住民にも「楽しい町の風景」として好意的に受け入れられているのだろう。

また、小澤さんは、一方的な押し付けにならないように意識しているとも話す。「人を集めるのではなく、日常的に人が集まってしまう場」が理想だという。普段使いができて、誰もがふらりと立ち寄れる「隙間」のような場所。町の余白であり、暮らしの延長。それが、地域に無理なく、持続的に根づいていくためのコモン的空間の重要な条件なのかもしれない。

多層的なイベントで、多様な価値を生み出す

年1回のイベントとして定着しつつある「KAWAYA市」の他にも、「クラスインフラスタンド」という学びをテーマとしたイベントも開催している。2025年6月には体験型の防災教室として、災害時を想定してインフラスタンドの敷地内でテント泊を実施し、火起こしや防災食の試食などを行った。「KAWAYA市」はブランディングや認知度アップとしての位置付けだが、「クラスインフラスタンド」はアクティビティを通して、密度の高いコミュニケーションを生み、新たな関係性や活動を育むイベントとして、今後も定期開催を目指している。

小澤さんが主催するイベント以外にも、他の主催者が場所を借りて行うイベントも増えてきている。取材に訪れた日には、大阪から来た主催者による「よりみちインフラスタンド」が開催され、三々五々集まった人々が、終始和やかに過ごす居心地のよい空気に包まれていた。

「イベントは毎月開催したいのですが、準備や調整はとても大変。当日も事故やトラブルがないように、気を配る必要がある。でも、人と人がつながり、コミュニティができていくことに大きな価値を感じています。地域のお店の方、イベントの主催者などとの日々のやりとりや相談ごとを通じて、自然とかかわりが広がっていく。使う人がかかわってくれることで、この場所が皆のものになっていくのを感じています。〈KAWAYA市〉と〈クラスインフラスタンド〉、そして場所貸しのイベントと、性質の異なるイベントを開催していくことで、より多様な価値を生み出していければいいですね」

「KAWAYA市」の夜の部では、ライブやライティングパフォーマンスも（photo提供:石和設備工業）

「KAWAYA市」は所沢市と連携し、隣接する都市計画用地まで使用して開催（photo提供:石和設備工業）

大阪から来たイラストTシャツなどを販売するamanicoさんが主催する「よりみちインフラスタンド」には、所沢の有名コーヒー店「リメナスコーヒー」、駄菓子屋「吉家商店」も出店

amanicoさんによるハンカチづくりワークショックは子どもたちに大人気

場とコミュニティから、業界の未来を見据える

インフラスタンドをつくったことで、イベントなどに真剣に取り組む姿勢に共感した人たちが自然と集まってくるようになったと話す小澤さん。この場所を介して出会った人たちとは、互いを尊敬し合って、ウィンウィンの関係を築いている。

いずれのイベントでも共通して意識しているのは、滞在時間とコミュニケーションの質と量を向上させることだ。単なる認知ではなく、人と人がつながり、関係性が発展していくことを意図している。それは、インフラスタンドを通じて関係性が広がったその先に、水道工事店としてのビジネスや業界全体の未来を見据えているからだ。

「水道工事店は受注で成り立つ仕事でしたが、今後は主体的にビジネスを起こしていけるように新規事業を計画しています。その一つが循環型トイレの全国展開。メンテナンスアプリの開発や地域代理店制度の構築など、各地域の水道工事店がビジネスの主体として自走できる仕組みをつくりたいと考えています。水道工事の仕事はできるようになるととても楽しい。若い世代にも興味をもってもらい、一人前になるまで継続できるように、将来を担う人材に積極的に投資していく必要があります。その先に、他の地域でもインフラスタンドのようなコミュニティが生まれるトイレが展開され、地域ごとに運営できる仕組みをつくっていきたいと考えています」

直接的な収益に結びつかないインフラスタンドを常にきれいで気持ちよく使える状態に維持管理しながら運営を継続していくことは、少なからず負担を伴うことになる。しかし、このような場があることで、持続的な人とのつながりや刺激を共有し、業界全体にも影響を与えるようなビジネスを展開していくアイデアとバイタリティが生み出されているとも感じさせる。

小澤さんが取り組むインフラスタンドの運営は、個人が主体となって公共性のある空間を育てていくコモニングの実践だ。同時にその発想はかたちを変え、水道工事業界の自律的なビジネスの創出へと広がり、他地域にも再現可能な仕組みとして展開されていく可能性を秘めている。

ケーススタディ

4

りくカフェ

岩手県陸前高田市

コミュニティガーデンの再生を契機に地域のつながりを取り戻す

陸前高田市のコミュニティカフェ「りくカフェ」。2012年1月に開業した仮設カフェを経て、2014年10月に本設カフェとして開業した

東日本大震災以降、被災した地域では国や自治体による大規模な復興事業が進む一方で、人々の日々の生活を支えるため、ボランティアを始め専門家や企業の支援を得ながらも、住民が主体となり、救援物資の受け取りや配布、炊き出しや情報収集などさまざまな活動を展開し、そのための場所や仕組みづくりをせざるを得ない状況が生じた。当時、それらの活動は「コモニング（コモン化）」という言葉では表現されていなかったが、この時期、コミュニティで利用・管理する共有地として大小のコモンズが各地に誕生していたことは間違いなく、それらはまさに、人々の実践や動態的な関係性によりコモン化された空間だったといえるだろう。

2012年1月、岩手県陸前高田市に誕生した「りくカフェ」もその一つ。東日本大震災で被災した都市のなかでもっとも甚大な津波被害を受け、何もなくなってしまった町のなかに「ほっと一息つけるような場所が欲しい」という声があがり、地域の女性たちを中心に、大学や専門家、企業とも連携しながら住民発意型のプロジェクトとして誕生したコミュニティカフェだ。当初は最低限の水道設備だけをもつ仮設カフェを、その後、運営団体のNPO法人化を始め、本格的なカフェ運営を目指してハード・ソフトの両面での検討を重ね、2014年10月にはコンロなどの厨房施設やトイレなども完備した本設カフェを開業。「誰もが楽しく集える場」「市内外を結ぶ架け橋」「健康と生きがいづくりの場」という3本柱の理念を掲げた活動を実践し、誰にも開かれた「まちのリビング」として、地域にしっかり根付いてきた。

ガーデンまつり開催の挨拶に立つ、特定非営利活動法人りくカフェ代表理事の鵜浦章さん（左）と、同法人理事で千葉大学大学院園芸学研究院教授の秋田典子さん

コロナ禍で途絶えた交流を再生

今年、桜前線も東北に到達し、路傍の菜の花、家々の庭を彩る草花が、春らしい明るい景色を見せていた晴天の4月26日、りくカフェには、動きやすいパンツスタイルにスニーカー、帽子を被り、手にはシャベルを持った人々がたくさん集い、賑わっていた。今日はこれから、カフェに併設されたコミュニティガーデンを会場に「ガーデンまつり」と称する植栽イベントが開催されるのだ。

「午後からのガーデンまつりにあわせて、今日は特別にワンコイン（500円）での〈健康ランチ〉もご提供することにしたので、皆さん早くから、たくさん集まってくださいました」

そう言って笑顔を浮かべるのは、特定非営利活動法人りくカフェ代表理事の鵜浦章さんだ。同敷地内にある診療所「鵜浦医院」の院長であり、カフェ、歯科医院、薬局が集積する敷地全体のオーナーでもある。

ガーデンまつりに向けて集まってきた地域の人々

りくカフェは開業以来、誰もが気軽に訪れ、食事やお茶を楽しみ憩える場としての役割を担ってきたほか、2015年からは、介護予防事業の拠点「りくカフェスマートクラブ」として、介護予防講座の開催などを市の地域支援事業の委託を受けるかたちで実施するようにもなった。日常的なカフェのメニューでも、栄養バランスを考慮した減塩・適正カロリーのランチメニューを提供したり、管理栄養士への栄養相談会、「百歳体操」と称して、定期的にみんなで一緒に体操する時間を設けるなど、地域の人々の健康づくりに貢献する施設としても活用されてきた。しかし、2020年以降、新型コロナウィルス感染症の蔓延に伴い「交流」そのものが避けるべき事態となり、カフェが休業。カフェ開業当初から、ハーブ園として整備されてきたコミュニティガーデ

カフェ、診療所、薬局、歯科医院などが集積するりくカフェの敷地。手前右手は最初に建てられた仮設カフェ、左手が本設カフェ。震災直後は仮設の医療機関の他、スーパーや書店、文具店などの仮設店舗も集まり、被災した人々の日常生活の拠点となっていた

これから植栽する苗の説明をする造園家の佐々木知幸さん

コミュニティガーデンに、みんなで植栽をスタート。「土はこれくらいの深さで大丈夫?」「元気に育ってね!」と楽しげな雰囲気が満ちる

トレリスのなかには、岩手県産品種のクレマチス「コトノハ」を植栽

ンも、訪れる人の減少・活動の制限に伴い手入れが追いつかなくなってしまった。さらに同時期には、周辺地域にあった仮設住宅も解消し、旧市街地の海岸線に近いエリアの整備も進み、コミュニティホールや博物館、商業施設が完成するなど、震災からの復興が進むと共に、りくカフェを取り巻く環境も変化していったのだ。

「スタッフのなかにも転居する方がいたり、他の仕事を始めたりと、カフェを毎日営業するには人手も足りなくて。ただこれまで、カフェや診療所に来た方がちょっとコミュニティガーデンに寄って手入れをしたり、屋外のベンチでおしゃべりをしたりという、何気ない交流が育まれている様子は、地域の方々の心身の健康にも効果があると感じてきました。そこで2024年には新型コロナウイルスも5類になったことを受け、なんとかガーデンを再生したいと、スタッフや、以前からお世話になっている専門家の先生方とも相談し始めたんです」と鵜浦さん。そんななか、スタッフの一人が緑のまちづくりに資する活動への助成事業「緑の環境プラン大賞」※の存在を発見。応募したところ、無事、助成を受けることができた。これをもとに土壌整備費や花苗、備品の購入費などを賄い準備を整え、この日、地域の人々へのガーデン再生のお披露目を兼ね、花苗の植栽を一緒に行うイベントを開催することになったのだ。

NPO法人の理事であり、初期からコミュニティガーデンの設営に携わってきた千葉大学大学院園芸学研究院教授の秋田典子さんは「最初のガーデンづくりでは、私たち専門家がコーディネートし、整備に奮闘しましたが、今回の再生では、りくカフェのスタッフが準備をして、地域の皆さんを巻き込んだ活動として立ち上がりました。そのことにとても感動しています」と、集まった人々を眺めながら笑顔を見せる。

秋田さんは震災後、りくカフェ以外でも、被災地でのコミュニティガーデンづくりを多く支援してきた。そこでは地域住民らが主体的に庭づくりにかかわり、人々との交流を育むと共に、心のケアにもつながっていることを実感してきた。しかしそれらは仮設住宅の敷地内や公園などに暫定的につくられたものが多く、行政による復興事業の進捗や地権者、運営者の都合によって消失したものが少なくないという。「ですが、復興が進み、環境が変化している今だからこそ、地域の皆さんが自分たちの場所と感じ、主体的にかかわることができるりくカフェや、コミュニティガーデンのような場所は大切だと思います」とも言葉を継いだ。

小上がり、テーブル席、カウンター席からなる本設カフェ。サインやメッセージがたくさん書かれた小上がりの壁は、もともとは仮設カフェの押し入れの引き戸だったものを移設

今日はガーデンまつりにあわせ、特別にワンコインの健康ランチを提供。久々のカフェ営業に、スタッフもどこか楽しげ

「自分の居場所」としてのコミュニティガーデン

復興やコロナ禍に伴う周辺環境の変化は、これまでりくカフェで展開してきたコミュニティ活動に思いがけない打撃を与えた。しかしそこで終わらず、コミュニティガーデンを再生しようといった声が自ずと湧き上がったのは、住民発意型のプロジェクトとして10年以上継続してきた活動のなかで、りくカフェにかかわる一人ひとり、あるいは、りくカフェを利用してきた人々さえもが、ここを「自分の居場所」として捉え、主体的にプロジェクトを提案し、実行に移せるような関係性を育んできたからだろう。

もちろん、りくカフェがある土地が私有地であり、そのオーナーである鵜浦さん自身がNPO法人の代表理事を務めていることは活動継続の大きな力になっている。コミュニティガーデンも、私有地だからこそ公的な復興事業とはかかわりなく残すことができたといえるが、単純に収益性や合理性から考えれば、宅地化したり、駐車場を増設するといった活用も考えられたはずだ。それでもこの場所を公共的な空間として開放し、今後もコミュニティガーデンとして運営していく道を選んだのは、ここには市場経済とは異なる価値があることを、鵜浦さんを始め、この場所にかかわる誰もが実感しているからに他ならない。

仮設カフェではこの日、「森の前薬局」による、健康無料測定会が開催されていた

NPO法人りくカフェのスタッフと、ガーデンまつりのために集まった専門家陣。秋田さん、佐々木さんのほか、前列左がコミュニティーガーデン・コーディネーターの木村智子さん、後列右が岩手大学准教授の荒木笙子さん

ガーデンまつりには、秋田さんを始め、初期にガーデン設営に携わった専門家メンバーも集まった。造園家の佐々木知幸さん、コミュニティーガーデン・コーディネーターの木村智子さん、岩手大学准教授の荒木笙子さん。荒木さんは初期のガーデンづくりの際には千葉大・秋田ゼミの学生として参加していたが、十数年の時を経て、今回は地元大学の教員として、ゼミ学生を伴っての参加となった。

佐々木さんの声がけで、集まった人々がそれぞれ苗を手に、いっせいにガーデン内に植栽していく。植栽された花苗は、比較的メンテナンスが容易な宿根草を中心に、ハーブ類も各種取り揃えられた他、アクセントとして、岩手県内の種苗場で開発されたクレマチスのオリジナル品種「コトノハ」も植栽された。苗を植えた人たちは「これは〈ルドベキア〉っていうの? 聞いたことない名前ねぇ」「どんな花が咲くのか、また見にこなくちゃ」「私が植えた苗が枯れちゃったら責任重大だよ（笑）」などと口々に言いながら、土いじりを楽しんでいる。そんな様子からも、今日、植栽に参加した人たちは、折々にガーデンを訪ね、自分の庭のように親しみをもってこれを育んでいくだろうことがはっきりと伝わってきた。

ちなみにりくカフェでは、コロナ禍以降、カフェの通常営業こそ行っていないが、2020年6月からは、毎週水曜日に、健康メニューの「テイクアウトランチ」（予約制）の販売をスタートしている他、百歳体操やスマートクラブとしての活動などは継続してきた。2024年10月には本設カフェ10周年を迎えた記念に「健康フェス」と称して、健康ランチの提供や薬局と連携した「健康無料測定会」、以前から親交のあるアカペラグループのコンサートを開催するなど、だんだんと、地域の人々の交流イベントも増やしつつある。コミュニティガーデンでの植栽が終わった5月半ばにも「春の寄せ植え講座」を開催、参加者らは再生されたコミュニティガーデンの様子にも関心を向け、成長を楽しみにしていたという。

私有地を公共的な空間として開き、住民ボランティアからスタートした運営がNPO法人として組織化され、そこに専門家らがサポートとして入りながら、運営者と利用者が互いに対等な関係性で入り混じり、一緒に一つの場を形成していく……。そんなりくカフェの活動は、コモニングという概念を象徴しているようだ。もちろん経営面では休業を余儀なくされている今、厳しい状況もあるはずだ。しかし少なくとも今回、ガーデンまつりを運営するスタッフ、そして訪れた人々の様子からは、それを上回る楽しさ、やりがい、充実感があることが伝わり、それが、とにかく動き、実践していくことで開かれていく「コモニング」の価値なのだろうと感じることができた。

※「緑の環境プラン大賞」とは、一般財団法人第一生命財団と公益財団法人都市緑化機構が主催する優れた緑の空間づくりの計画を顕彰し、助成する事業。りくカフェは第35回（2024年度）緑の環境プラン大賞「ポケット・ガーデン部門」にて第一生命財団賞を受賞。

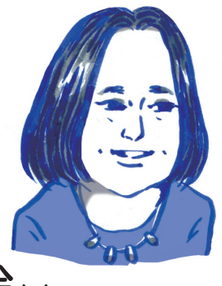
なぜかいい町、好きな町

第4回

神保町

神保町といえば世界有数の古書店街。さらにカレーの街、老舗喫茶店の街としても知られており、古書店を巡り、カレーでランチ、喫茶店で本を読むという町歩きの王道ルートが存在する。しかし今回は、都市政策の専門家でもある野澤さんに、「町の変化」をテーマに、JR御茶ノ水駅から東京メトロ神保町駅に至る界隈をご案内いただいた。

イラスト:広瀬摩紀



案内人

野澤千絵さん

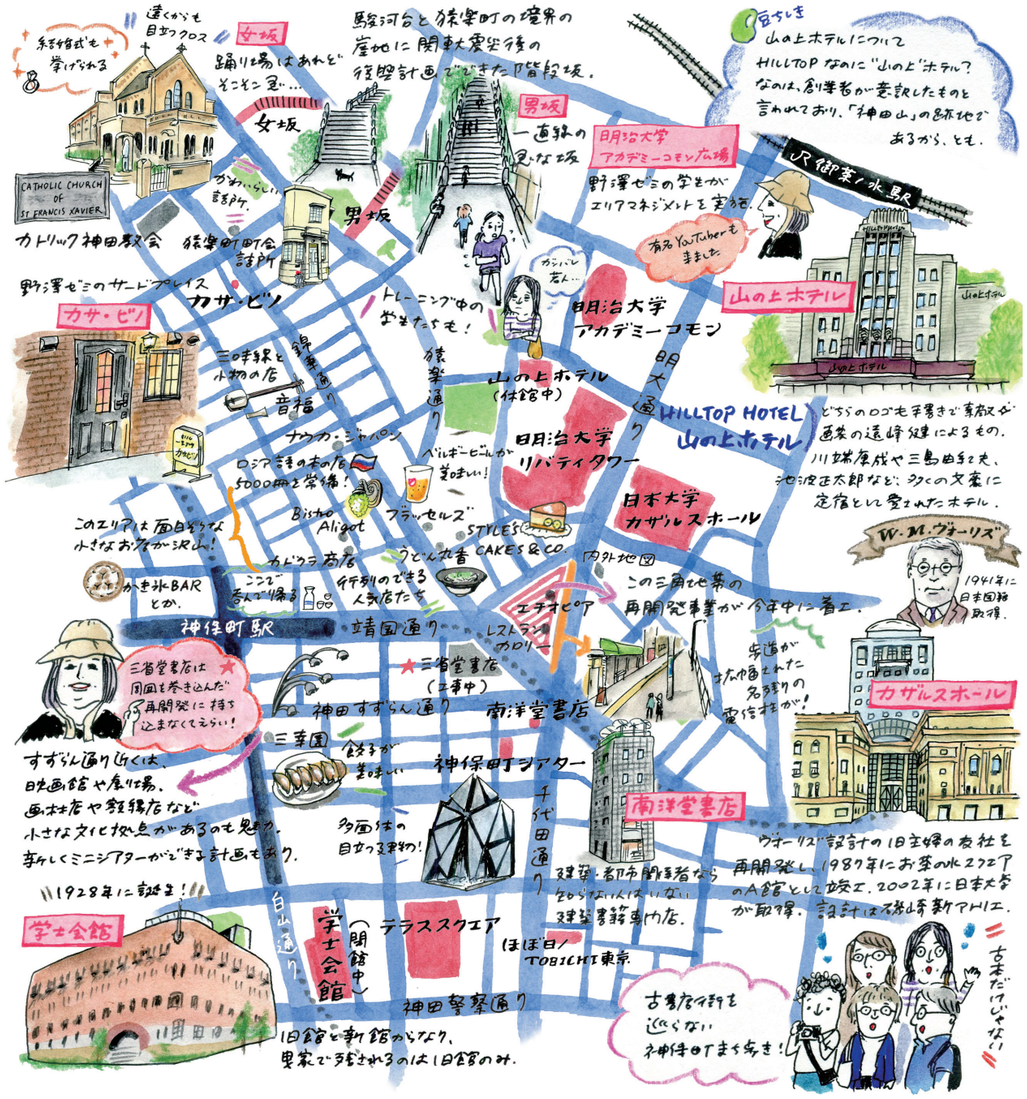
のざわ・ちえ
明治大学政治経済学部教授。博士（工学）。専門は都市政策、都市行政、まちづくり。著書に『2030―2040年日本の土地と住宅』（中公新書ラクレ、2024年）、『老いた家　衰えぬ街　住まいを終活する』（講談社、2018年）、『老いる家　崩れる街　住宅過剰社会の末路』（講談社、2015年）他。本誌企画委員。

スタートは明治大駿河台キャンパス・リバティタワーから。道路を挟んで対面、W.M.ヴォーリズ設計の旧主婦の友社のファサードを復元しているのは、「日本大学カザルスホール（日本大学お茶の水校舎）」です。ヴォーリズは明治から昭和初期にかけて、日本の洋風建築を数多く手がけましたが、「山の上ホテル」もその一つ。山の上ホテルは、老朽化により休館中ですが、2024年11月に明治大学が取得。この歴史的建築物の外観を維持し、ホテル機能も一部残しつつ、地域に開かれた施設として改修することが計画されています。

古書店街もそうですが、個性的な小さな店が密集しているのも神保町の魅力。とくに錦華通りと白山通りの間には昔ながらのバーや喫茶店、最近は古い建物をリノベーションしたおしゃれなバルやビストロも増えています。この、一見さんにはちょっと扉を開けにくい「カサ・ビノ」は、ママが一人で切盛りするスナックで、野澤ゼミのサードプレイスとなっているお店。じつはランチもやっていて、そんなに入りにくい店ではないんですけどね。学生にも良くしてくれて、逆にランチ時にはゼミ生が手伝ったりすることも。こういう場所があると、町と学生につながりができて、町に対してより親しみをもてますよね。

老舗にはそういった人と町のつながりが積層し、それが町の魅力にもなっているはずですが、いま私が気になっているのは老舗カレー店「エチオピア」のある街区の今後。エチオピアを筆頭に飲食店が集積するこの一帯、明大通り・靖国通り・富士見坂に囲まれた三角形の土地を集約した再開発事業が進行中です。商業・オフィス・住宅からなる高層ビルが計画されていますが、新築となると賃料が上がるので、現在ここにある店が引き続き入居されるのかどうか……。

神保町を貫く幹線道路の白山通りや靖国通りは都市計画道路として拡幅が計画されているので、これが実現すると神保町の雰囲気はだいぶ変わると思います。都市計画道路は戦災復興計画（1946年）で決められたもので、すでに80年近く経過していますが、計画自体は無くなっていない。そのことをよく表しているのが白山通り沿いの学士会館。1928年に竣工したこの建物は、東京都の指定有形文化財となっていますが、老朽化のために閉館、隣のビルと共同での再開発に伴って工事中です。ただ、学士会館が建っている敷地は幅員40mとする都市計画道路の計画線にかかってしまっていた。そこで、歴史的な建物を保存・活用しようと、旧館のみですが、曳家をして残すことになりました。



白山通りの神保町交差点を見ていただくと、少し後退したところには高層建築が建っていますが、道路に面した建物は2、3階程度の低層となっていますよね。低層建築部分は都市計画道路の計画線が引かれているエリアであるため、3階以上の建物に建て替えることができないという都市計画制限がかかっているのです。いまさらここまで大幅な車道拡幅が必要かな、とも思いますが、歩道になる可能性もありますし、長年、都市計画制限をしてきた地権者のことを考えると、計画自体を白紙に戻すのは難しいでしょう。

再開発や道路の拡幅・整備が進むことで、昔ながらの町並みや建物が失われることへの危惧や不安はあります。ただ、神保町という町がもつ歴史や文化を生かし、みんなで知恵を出し合って継承していく工夫や努力をしていけば良いはずです。

今日はちょっと「ザ・都市計画」みたいになっちゃいましたけど、新旧入り混じったマニアックな神保町の見方、いかがだったでしょうか？

都市の緑
3表彰

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」（共催）、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」（いずれも特別協賛）の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文：佐藤真　photo：坂本政十賜

緑町公園の六角錐状のピラミッド型ばら花壇「ローズヒル」。正面の花壇には、歌、リズム、踊りなどの音楽にかかわる品種名のばらが植えられている

思いやり・やさしさ・助け合いの心を表す「ローズマインド」は、福山のまちづくりのベースとなる言葉として市民に根付いている

［第44回］

緑の都市賞
国土交通大臣賞：緑のまちづくり部門

ばらのまち福山「ばらの花いっぱい運動」

ローズマインドによるまちづくり

JR福山駅の改札を出るやいなや、ばらの甘い香りが鼻に飛び込んできた。目の前のロータリーには、ばらの花壇がしつらえてあり、幾分ピークを過ぎたとはいえ、いくつもの大輪が私たちを迎える。「ばらのまち福山」とはよく言ったものだ。まさか福山駅に到着したとたんに、ばらたちの洗礼を受けることになるとは、思いもしなかった。まさに、福山は「ばらのまち」である。ばらの力でまちを活性化させ、未来に向けて持続可能なばらのまちづくりを進めているまちなのだ。

ばらのまちづくり発祥の地「ばら公園」。2024年に植栽デザインをリニューアルし、約670種、約7000本の多彩な品種のばらを楽しむことができる

福山市は、広島県の東部、瀬戸内海の中央に位置する、風光明媚で穏やかな海と緑の島々が織りなす自然美に恵まれた、人口約45万人の中核都市だ。70年近くの長きにわたって、ばらを戦災からの復興と希望の花として市民は愛し慈しんできた。市民のこころのなかに根付いたこの想いは、やがて「ローズマインド（思いやり・優しさ・助け合いの心）」という言葉を生み出し、福山市全体に潤いと活力を与え続ける。

戦争の傷痕が癒えない1950年代半ば、優雅に咲き誇り華やかな姿をもつばらは、戦後の復興と共に全国的に人気が高まる。福山市においても、ばらの愛好家団体「福山ばら会」が発足し、家庭でのばら栽培が普及する。こうしたなか、まちの復興に向け懸命に生きる市民の間で、「花を植えよう。荒廃したまちに潤いを与え、人々のこころに和らぎを取り戻そう」という機運が次第に高まっていく。当時の市長は、「公園をつくるのであれば特色のあるものにしたい」という希望があり、その想いも重なって南公園（現在のばら公園）には市民によって約1000本のばらが植えられた。これを契機に本格的なばらのまちづくりが始まった。

1965年に後の「福山明るいまちづくり協議会」となる「福山市を美しくする委員会」が発足し、「花は美しい、それを愛し育む人の心はなお美しい」を合言葉に、ばらづくりを中心とする花いっぱい運動が起こる。時を同じくしてばら公園の整備に積極的にかかわった花園町町内会が、1968年に全国美しいまちづくり賞・最優秀賞を受賞する。ばら公園の受賞記念碑に刻まれた「ここに善意の花ひらく」という文言は多くの共感を呼び、市内各地で市民の手による「ばら花壇」が整備されていく。そうしたなか1969年には、ばら花壇コンクールが始まる。家庭の庭先から道沿いの小さなばら花壇など市内の至る所で、地域住民や子どもたちが育てたばらが咲き誇る姿を誰もが目にするようになるのだ。

100万本のばらのまち福山の実現

1956年、ばらの愛好団体「福山ばら会」が「第一回バラ展示会」をばら公園で開催。この展示会は、当初愛好家らが育てたばらを展示するというものだったが、参加者の裾野が広がり運営体制も整備されるにつれ、その規模も拡大する。ばら鑑賞にとどまらず誰もが楽しめる福山最大のイベント「福山ばら祭」となり、ばらは市民にとってより身近に親しまれるものになっていく。

1985年4月、ばらが市の花に制定される。翌1986年には、市制施行70周年を記念し、福山と名の付く最初のばら「ローズふくやま」が誕生する。ばらは文字通り福山市のシンボルとなった。2006年5月、ばらのまちづくりの発祥の地である「ばら公園」は、世界バラ会連合優秀庭園賞を受賞する。

時は下り2010年3月、これまでのばらのまちづくりをよりいっそう前進させるために、市は「ばらのアクションプラン」を策定した。福山の知名度・都市ブランドの向上、シンボルとなる拠点の充実・拡大、市民のばらに対する「想い」の共有を目指すというもので、具体的な目標として、当時のばらの植栽推計本数55万本を、市

緑町公園「ばらの野外ミュージアム」。ローズヒルの頂上部には「ばらのまち福山」の歴史やばらの歴史などが学べる展示パネルが設置されている

福山の名を冠した11種類あるばらの一つ「ラブリーふくやま」。「レーゲンスベルグ」と「オレンジジュエル」の2種類から市が開発したミニばら。花壇や鉢植えで楽しめると市民に好評

アーチにつるを這わせて立体的に演出

ばらを際立たせるため宿根草などと組み合わせて植栽されている

制施行100周年にあたる2016年に100万本とすることを掲げた。

この計画の実現のため、各地域の拠点となる公園にばら花壇を整備したほか、福山駅周辺や国・県道などの主要道路への植栽、またJR福山駅からばら公園につなぐローズロードの整備や全公立小中学校にばら花壇の設置などを行った。また、こうした環境整備のほかに、市民へのばら苗配布や出生祝い、入学記念、新築記念などでのばら苗配布、地域などが整備するばら花壇への補助、地域ばら花壇の栽培リーダーを養成するための福山ばら大学の開催などさまざまな取り組みを市民、事業者、行政が役割分担しながら協働により進めたのである。

2015年9月、これまでの取り組みをさらに発展させるための新たな目標を明確にするために「福山市ばらのまち条例」が制定され、5月21日を「ばらの日」と定めた。そして2016年5月21日、念願の「100万本のばらのまち福山」が実現した。

「ばら栽培のことならなんでも聞いて」。ばら公園内に設置されたばらの栽培相談所では、福山ばら会のメンバーたちがばらに関するどんな相談にも応じてくれる

世界バラ会議の開催と都市ブランドの確立

2017年より世界バラ会連合が主催する世界バラ会議の誘致活動に取り組んできた福山市は、今年2025年5月（18日～24日）に福山大会を実施した。世界バラ会議とは、世界40カ国が加盟する世界バラ会連合（The World Federation of Rose Societies）最大の、3年に1度開催されるばらに関する国際会議で、加盟国からばらの研究者、生産者、愛好家などが約600～700人が一堂に会して交流したり知識を深めたりする場のこと。アジアでは、2006年の第14回大阪大会以来2回目の開催となる。

福山城公園プロムナードでの歓迎レセプションで始まり、ばらの品種保存および耐病性をテーマにした講義、ばらを育成する地域花壇や学校の視察、市中心部の商店街では交流会なども行われた。また関連イベントとして、「ばらの世界を旅する」をテーマとしたばらの祭典「Rose Expo FUKUYAMA 2025」を同時開催し、国内外から多くの来場者を迎えた。

福山市の「ばらのまちづくり」の特徴は、「市民がこころを込めて育てているばら花壇が地域全体に広がっていることにある」と言うのは、福山市世界バラ会議推進室・ばらのまちづくり推進担当次長の市川宏治さんだ。「公園だけでなく、家の軒先や主要道路、小学校などの至る所で、ばらが美しく咲き誇り、道行く人々のこころを癒し、安らぎを与え、まちなかの良好な景観形成につなげていると共に、住民同士のつながりを深めている」というのである。

戦後、まちの復興の願いをばらに託した市民によるばらの植栽は、魅力的で特色のある都市公園の整備や良好な景観づくりにとどまらず、地域の絆を深めるシビックプライドとなり、「ばらのまち福山」という都市ブランドの確立へとつながっている。そしてばらから生まれた勇気や希望、多様なコミュニティ活動は、花や緑が時代を超えて人々にこころの豊かさをもたらし、暮らしに彩を与え、まちの発展に大きく寄与する力があることを示した。

現在福山市では、福山版ガーデンツーリズム推進計画「ローズマインドに出会う旅」に取り組んでいる。この取り組みによりばら公園やまちなかに広がるばら花壇、さらには地域の特産品やイベントが一体となり、訪れた人々に福山の魅力を深く感じてもらえるような仕組みを構築し、観光振興につなげていくだけでなく、ばらを通じた交流や連携による地域コミュニティの活性化に取り組んでいる。さらなる持続可能なばらのまちづくりに期待したい。

福山市世界バラ会議推進室・ばらのまちづくり推進担当次長の市川宏治さん

ばらを近くで見て感じ、安心してばらを楽しめるように、ばら公園内には散策路がはりめぐらされている

福山城公園（福山駅北口スクエア）。福山駅北口スクエアからのばら越しの福山城。写真映えするスポットと評判だ

【参考文献】
市川宏治「都市公園の整備から都市ブランドの確立へ」（『都市公園』no.242　公益法人東京都公園協会発行 2024）、市川宏治「ばらの力でまちの活性化［人の想いをつなぐローズマインドばらのまちづくり福山］」（『都市緑化技術』no.123 公益財団法人都市緑化機構発行 2024）、市川宏治「ばらのまちづくり発祥の地〈ばら公園〉リニューアル」（『公園緑地』Sep.2024 vol.85 一般社団法 日本公園緑地協会 2024）

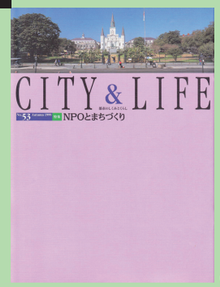
back number

『City&Life』は1984年2月に創刊、「都市のしくみとくらし」を基本テーマに毎号特集を組み、国内外の事例紹介などを行っています。
年3回（4月・8月・12月）発行、頒価500円＋送料実費でご購読いただけます。
毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧になり、ご希望の号をお求め願います。（定期購読は諸般の事情により受付を終了しました）

City&Life バックナンバー
https://dl-foundation.or.jp/citylife_magazines/

今号と関連する特集号をPick Up

No. 53 ［特集］NPOとまちづくり

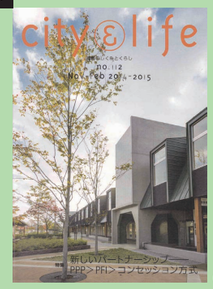


(1999.9)

No. 103 ［特集］時間に暮らす

(2012.3)

No. 112 ［特集］新しいパートナーシップ ――PPP>PFI>コンセッション方式

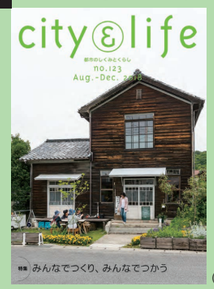


(2014.11)

No. 118 ［特集］空き地カルチャー ――多孔質都市の可能性

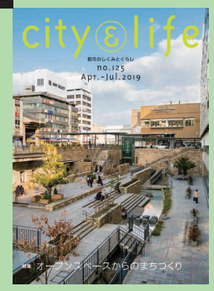
(2016.11)

No. 123 ［特集］みんなでつくり、みんなでつかう



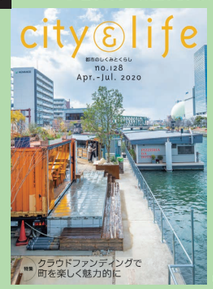
(2018.8)

No. 125 ［特集］オープンスペースからのまちづくり



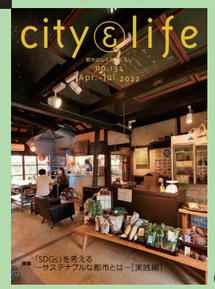
(2019.4)

No. 128 ［特集］クラウドファンディングで町を楽しく魅力的に



(2020.4)

No. 134 ［特集］「SDGs」を考える ――サステナブルな都市とは――［実践編］



(2022.4)

No. 143 ［特集］わたしのまちの独立系書店

近刊

(2025.4)

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、「子どもの未来を応援する」事業として、新設後3年以内の保育所（認定子ども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「都市の緑3表彰」に取り組んでいます。

お知らせ

第一生命財団では助成した研究について、その成果である調査研究報告書を発行しています。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

第一生命財団ホームページ「調査研究報告書」
https://dl-foundation.or.jp/research/citylife.html

City & Life 144 Aug. 2025

2025年8月発行

企画委員　陣内秀信（法政大学名誉教授）
大村謙二郎（筑波大学名誉教授）
小泉秀樹（東京大学教授）
木下庸子（工学院大学名誉教授・設計組織ADH代表）
野澤千絵（明治大学教授）
北奥郁代（第一生命財団常務理事）
佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）

編集・発行　一般財団法人 第一生命財団
東京都千代田区平河町1-2-10平河町第一生命ビル2階
電話03-3239-2312

編集協力　株式会社 アルシーヴ社
斎藤夕子
村田保子

デザイン・レイアウト　河合千明

印刷　株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172

一般財団法人 第一生命財団

City & Life

no.144
Aug. 2025